

氏名	宮内弘
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第348号
学位授与の日付	平成10年7月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	英詩の文体論批評——イエイツとラーキンを中心に

(主査)

論文調査委員 教授 豊田昌倫 教授 喜志哲雄 教授 中村統一

論文内容の要旨

本論文は、英詩のテキストに即して、そこにあらわれる言語的(文体的)特徴と作品の文学的テーマとの微妙な関係に焦点を合わせながら、これまでとは異なった角度から、テキストの内部構造の一端を明らかにし、作品の解釈に迫ろうとするものである。

本論文の構成は第一部と第二部から成り、第一部では4章を設けて、文体、批評、言語に関して、おおむね理論的な側面を概説する。本論文の主要部分をなす第二部は文体論批評の実践で14章から成る。

第一部の第1章「文体論について」では、文体論に関する考え方、その研究の歴史、論者の文体論における立場などを論じる。次にスピッツァー、リファテール、ハリデイ、ハッサン、最近の文体論学者などの理論と実践を具体的に考察する。これらのことを通して論者は文体論研究にとって大事なことは、作品の特徴的な言語パターンを見だし、それを読む行為の中でとらえ直すことによって内容との関連性を考えていくことであることを力説する。

第2章「文学の言語と批評理論」では本論文と関わりのある批評理論を特に言語との関連を中心に考察する。文学批評は1920年以前には「作者」中心のものであったが、それ以降の「新批評」や「読者反応論」の台頭と共に、批評家の関心が「作者」から「テキスト」や「読者」へと移行していった。それと軌を一にするかのように、言語観も変化してきたが、これらの移行の過程を、「構造主義」や「脱構築論」にも言及しながら跡づける。

第3章「結束性(cohesion)について」では、ハリデイ、ハッサンの提唱した、意味上の結合関係(cohesion)を論じる。cohesionはテキスト中の構造的に無関係な要素に意味の連続性を与え、首尾一貫した意味単位を作りあげるもので、文体研究にも応用できるきわめてユニークな概念である。論者は分析をより細かいものにするために、結束性を「節」のレベルにまで引き下げてスウィフト、ジョイス、ローレンスの文体分析を行い、スウィフトの作品は接続による結束性が強固で、作者誘導型の文体を形成していること、またこれと対照的にジョイス、ローレンスの小説は結束性が希薄で、読者が自分で空白を埋めなければならない読者主導型の文体が顕著であったり(ジョイス)、非論理的側面が濃厚である(ローレンス)ことを立証しようと試みる。

第4章「英詩と喚起指示詞」では、詩におけるthat, those, such, soなどの喚起指示詞の機能を論じる。英詩で使われる喚起指示詞は、詩人が詩の中に込めた感情を持続的に読者に喚起させる力が大きいと、読者の積極的な作品への参与を促すことをシェイクスピアの「ソネット73番」をはじめ、イエイツのいくつかの詩の中で具体的に示す。

第二部の「文体論批評の実践」ではシェイクスピアの『ソネット集』を除いて現代詩を扱っている。ここにおさめられた論考に共通していることは、テキストの精読を通して作品に迫ろうとしていることである。

第1章では、イエイツの個人的思想体系に基づいた従来の解釈とは全く違った角度から「レダと白鳥」を分析する。指示詞が全詩を通じて絶え間なくタイトルやそれに続いて起こるトロイ戦争に言及しながら、個人の肉体的事件をより普遍的な歴史の流れの中に統合するのに重要な役割を果たしている点に着目し、短いソネットの枠組みの中で、個人の歴史中最も重

要な瞬間と、個人を超越した普遍的歴史の流れの決定的瞬間とが見事に合体していく過程を考察する。

第2章の「1916年の復活祭」は復活祭に蜂起した人々のことを扱った詩であるが、詩人は彼らの死を前にして、賞賛と恐れの入りが交った複雑な感情を抱く。この複雑な感情が、いかにしてリフレインや逆代名詞化のパターンの中に組み入れられ、この詩を魅力的なものにしているかをことばの分析を通して追究する。

第3章では精神・芸術の理想の都ヒザンティウムを歌った二つの詩、「ビザンティウムに船出して」と「ビザンティウム」を扱う。両方の詩にはトリオをなした句・単語が多くみられるが、そのトリオの使い方にそれぞれの詩の本質につながるような違いが認められることを詳細に検証する。論者は、「船出して」では対等の関係でバランスよく並べられたトリオに詩人の統制がよく表れているが、「ヒザンティウム」の方ではトリオの構成素はあとのものほど、深化、敷衍され、詩人の内面の葛藤がいつも制御できるとは限らないことが微妙に反映されているとする。

第4章で扱う「学童の中で」は詩人が学校を視察したときの体験をふまえて作った詩である。詩人の恋人への愛、尼僧の神への愛、母親の子供への愛によって生まれる三種類のイメージは、偶像の最高の美を抽出した静的なもので、ことごとく人間を欺き嘲る。このように静的で断片的な物の見方をする限り、人間の労苦は花開かない。一方世界は刻々変化し、一切の対立物が融合した有機体である。そこで動的でかつ統合的な視点を持ち込むことによつて、はじめて詩人を悩ませていた対立物がすべて融合され、「存在の統一」が達成される。詩人が本詩でこのような境地に達する過程を文体やイメージ分析によって明らかにする。

第5章「天上と地上の間」では「恋人の歌」と「あめんぼう」の二つの詩を扱う。これらの詩は三つのものからなるparallelismの他に、複数の世界の間を揺れ動くという点で非常によく似ているが、論者はこの類似性を念頭に置きながら、相反する世界を結び付ける接点について考察し、性結合や静寂が「存在の統一」を形成するものとして重要な働きをしていることを明らかにする。

第6章「気がふれたジェインの歌」では一連のCrary Jane Poemsを扱うが、論者はこれらの作品中のリフレインに注目し、そこに内在する、ことは多義性や聖なるものと俗なるものとの価値関係の逆転の中に主人公の「狂気」の特質を探る。

第7章「イエイツ晩年の詩歌をめぐって」では、後期のバラッド風の軽い調子の詩である「子守歌」と「三つのもの」を中心に論じる。これらの詩には、客観性と個人的感情、決定づけられた運命と人間の自由意志、無垢と経験などにみられる緊張関係、及び均衡の中の不均衡、ウィット・落差などの形而上詩的特質が顕著に認められることを検証したうえて、論者はイエイツがこれら形而上詩的特質と既にあったロマン派的、象徴派的基盤とを有機的に融合することによつて独自の詩風を切り開き、晩年の強靱な詩を生み出していったのではないかと推論する。

第8章「詩の結末にみられるイエイツ的転換」は個々の詩の解釈というよりも、イエイツの詩の終わり方のパターンの特徴の解明に重点を置いて論じたものである。イエイツの中・後期の詩の結末部分で、転換やゆれが生じる現象がしばしばみられるが、これらが詩の中でどのように機能していくかを具体的に検討したのち、死の前年に書かれた「人とこだま」において、このイエイツ的特色が単にさまざまな詩的効果を生み出す技巧であるにとどまらず、詩人の人生に対する姿勢を反映したものであることを具体的に論証する。

第9章「『ソネット集』における鏡の論理と文体」は『ソネット集』全体の中の「鏡」に焦点を合わせてその論理や文体を追究したものである。友人の美を永遠に残すためには、彼が結婚して子孫を残すべきだという詩人の忠告が、合わせ鏡による無限の像のイメージと重なり合ったり、友人の虚像と実像との間を微妙に揺れ動く詩人の気持ちが、左右が逆転する鏡の文体に表現されていたりする例などに注目しながら、さまざまな相の鏡と作品のテーマとの密接な結びつきを明らかにする。

第10章「ブルーロックの恋歌」では、「君とぼく」とは一体誰だろうかという問題を不定代名詞‘one’との関連でとらえ直すことによつて新たな解釈を試みる。この詩には、主人公を行動の世界に駆り立てるロマンティックなムードと無気力で不活発なムードとが認められるが、論者は「君とぼく」を二つのムードに対応させて、「君」は、‘one’で表される現実の恋人とは対照的に、彼自身の内部にいるもう一人の内なる恋人を、「ぼく」は心の奥に潜む優柔不断で臆病な自己を表していると解釈する。

第11章「ディラン・トマスの初期の詩二篇」では「緑の茎の中を……」と「私がちぎるこのパンは」を論じる。論者は、前者の詩は弁証法的にイメージを増殖させながら、生と死の表裏一体性、生殖を原動力とする自然界のサイクルと人間との

相似関係、詩人の詩や性に対する挫折感などを歌ったものであるとし、形而上詩的な遊びの精神にあふれている後者の詩は、表面的には聖餐式の体裁をとっているが、実は相手の女性を口説く歌ではないかと解釈する。

「ブリーニーさん」を扱う第12章では、ラーキンの伝記的側面をも考慮に入れつつ、独身で惨めな生活を送っていたブリーニーさんと話者（詩人）との関係を中心に分析する。話者の心の中では自分とブリーニーさんの類似を強調する声と相違を強調する声とがせめぎあうが、最後には、類似を強調する声の方が強まってくる。論者はこの話者の心の動揺が「知っている」と「知らない」という相反する意味を包含している‘I don't know’ということばによって微妙に制御されているとする。

第13章「光と影ーラーキンの列車の旅の詩」では列車の旅の詩を扱っている「聖霊降臨祭の結婚式」と「ここ」を中心に考察する。論者は列車の旅は人生行路にも通じるとし、前者が昼の旅であるのに対して後者は夜から朝にかけての旅であるため、両者は陰と陽の対照的な関係を有していること、前者は結婚を、後者は孤独を扱うが、詩人は結婚と孤独という相反する人生の側面を、光と影の両面から我々に呈示していることを二つの詩を比較しながら明らかにする。

第14章「ラーキンの二重性」では「結婚の風」と「アランデルの墓」を論じる。「結婚の風」は、二面性をもつ「風」のイメージを利用しながら、新婦の愛の喜びとその永続性に対する不安な気持ちを同時に歌った詩であることを、「もつれさせる」と「ほどく」という全く反対の意味を同時に内包する‘ravel’を足がかりにして論証する。同様に、二つの意味をもつ‘lie’を媒体にして、相反する二重の意味を詩全体にまでおしひろげていく手法が「アランデルの墓」においてもみられることを詩の分析を通して具体的に示す。

論文審査の結果の要旨

本論文は、詩においてとりわけ重い比重を占める言語特徴を分析することによって、言語と作品のテーマとの関連を明らかにする文体論批評を實踐し、近代英語期の代表的な英詩について新しい解釈を提示したものである。全体は第I部「文体・批評・言語」と第II部「文体論批評の實踐」からなり、第II部ではW. B. イェイツ、シェイクスピア、T. S. エリオット、ディラン・トマスおよびフィリップ・ラーキンの詩が分析されている。

第I部では、まず文体論と文学の言語をめぐる批評理論が示される。論者はレオ・スピッツァーの『言語学と文学史ー文体論試論』（1948年）に感銘を受けて、彼が目指した言語と文学のかけ橋を理想とし、最近のロンドン学派の知見に基づいて新しい文体論批評を構築する。具体的な言語特徴として選ばれているのは、特に結束性（cohesion）と喚起指示詞である。結束性とは意味上の結合関係であり、テキスト中の要素の照応、たとえば指示、省略、反復、接続などによる意味の統合関係と言い換えてもよい。指示詞ではthis (these) とthat (those) を取り上げて、後者は前者に比べて詩人が詩の中にこめた感情を持続的に喚起する力が大きく、指示機能とは区別される喚起機能をもつと主張されている。こうした喚起指示詞は読者の積極的な作品への参加を促すと論者は主張する。結束性および指示詞の分析自体は客観的である反面、機械的な分析に陥りやすく、直感を働かせて読むという文学にとって重要な行為が欠けることになりかねない。言語パターンは内容の裏づけがあってはじめて文体事象となるからである。論者は言語特徴の記述に終わることなく、言語の特徴を内容との関連を考慮に入れつつ独自の文体論を展開する。

本論文の中心は、第II部の「文体批評の實踐」であり、論者は第I部で設定された理念に基づき作品の精読を通して作品の本質に迫ろうとする。イェイツに関する8つの章の中でとりわけ独創性に富むのは、「レダと白鳥」および「1916年の復活祭」を扱った章である。ギリシア神話ではゼウスが白鳥となってレダを凌辱した話はよく知られているが、この話をイェイツがソネットの形式で詩作したのが「レダと白鳥」である。この14行の詩において22回も使用される指示詞は、2例の不定冠詞および1例の無冠詞をのぞきすべて定冠詞が用いられている事実論者は着目する。こうした定冠詞が与える結束性ないしは連続感と、行またがり、中間休止、不定冠詞などによって生み出される断続感とが拮抗作用を起こして詩的緊張が生じる。そしてこの言語レベルでの緊張は、他の次元での緊張（瞬時と永遠、男と女、力と知、生殖と破壊）に構造的基盤として働くとの指摘は、鋭くまた説得力をもつ。「1916年の復活祭」はダブリンでのイギリスに対する復活祭蜂起を扱った作品であり、この章でも指示詞が論述の出発点となる。第1行における複数の指示詞（them）から単数の指示詞（that woman, this man）、さらに固有名詞への変化は、統一体から分解へと進む過程の中に革命家の悲劇が示唆されていると論

者は主張する。

このように具体的な言語特徴から作品の本質へと迫るアプローチは、論者がもっとも関心をよせるイエイツ以外の詩人にも適用されてゆく。『ソネット集』における鏡の論理と文体」の章では、エリザベス朝の人々にとって驚嘆の的であった鏡とシェイクスピアの『ソネット集』の内部構造との関連に焦点が合わされて、鏡の左右対称の特質と虚像と実像の間を揺れ動く詩人の心情が巧みに分析されている。T. S. エリオットの詩を扱う「ブルーフロックの恋歌」では、I, you, それにoneの関係が解明され、「ディラン・トマスの初期の詩二編」では、とくにイメージの使い方とことばの重層性の観点から、人間と自然の相似関係がイメージを増殖させ、人間が自然界のサイクルに従って動くさまが明らかにされる。また、現代の詩人フィリップ・ラーキンに関する3つの章では、テキストの言語分析を通して「ラーキンの二重性」が解明される。特定の形式がラーキンの詩においては肯定と否定という正反対の意味をも同時に担いうる例を示して、論者は愛の喜びと永続性への不安を同時に歌うところにこの詩人のアイロニカルな響きを感じ取る。

論者は作品の正確で緻密な読みを出発点として特徴的な言語パターンを見だし、それを詩の本質的な解釈と結びつけるが、この作業こそ文体論批評の本道であろう。文体論は文芸批評と言語学のかけ橋と期待されながらも、多分に理念的な領域にとどまり実践例に乏しいと批判されてきた。本論文は、英詩を文体論の立場から本格的に論じた貴重な成果である。第I部で設定された結束性と喚起指示詞という分析の枠組みが、第II部では必ずしも統一的に適用されず、ときにイメージや音韻特徴、詩人の伝記的事実が論拠とされるなど論の進め方にいささか問題が残るとはいえ、それは全体として論者が提示した実証的な文体論批評の価値を減じるものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1998年5月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口答試問を行った結果、合格と認めた。